

パリ・コミュン下の子どもたち

——ムーリス・ドマンジュ作『パリ・コミュンの人たちとその物語』より——

訳 川口幸宏

1.

パリ中心部の富裕層の子どもたちは、パリ包囲の間も、近郊の貧困層の子どもたちと比べて恵まれていた。彼らは両親の社会的状況の恩恵を受け続けていた。彼らの両親は、いつもと変わらず、ヴェルサイユ側の者たちの饗宴が行われていたル・ギニョールへと、連日足を運んでいた。ル・ギニョールは、当時、どんちゃん騒ぎができるようにふくらみが造られていたシャンゼリーゼ通りの円形広場を超えたところにあった。当時、ある通信記者は「ポリシネル、警察署長、そして腕白坊主までも」と皮肉一杯に言ったように、引越しを余儀なくされたほどである。

貧困層では、両親が戦闘や労働の間、大多数の若者は解雇され、大多数の子どもは通学せず、道端で一人で時を過ごしていた。家を離れ首都の街路を放浪する者たちは日々をどう送っていたのだろうか。勤労者階級の置かれていた厳しい状況はすべてのプロレタリア階級の子どもにとって過酷な影響を与えないはずがなかったことは確かである。一方、幼い無邪気な子どもたちは、男の子も女の子も、たくさんの砲弾で遊んでいた。つまり砲弾が子どもたちの遠くないところに落ちた場合、しばしば、彼らは歓声を挙げてそこへ馳せ参じていたのである。

Allix が作成した統計によれば、18 区内には 7 歳から 15 歳の男女の子どもたち 6,251 人いたというが、公共学校は 3,030 人つまり半数さえも生徒を受け入れていなかった。それとてよく見れば、3,030 人の生徒のうち 3 歳から 7 歳の子どもすべてが区内の保護所に通っていた、と Allix が計算していることに気づかされる。この統計を見るにあたって、5 歳に学齢が始まるのであって 7 歳ではないということを忘れてはならず、多くの学校を設置していた 18 区のような行政区において、少なくとも 4,000 人の学齢児童が教育施設のらち外に置かれていた。非就学に対していくつかの区役所によって取られた措置は、勤労者の経済的貧困から要求された措置であったところの、靴や衣料の配給、学校給食施設というものにはとうてい及ばない微弱なものでしかなかったことは確かである。

保育施設については一定の努力がなされた。つねに欠員状態であった子どもの数は何度かの呼びかけで増加した。比較的その数が多い 18 区では、二つの保育施設で、3 歳から 7

歳の児童数 271 人を数えている。

つづいて区役所の庇護の下にあった孤児院建設について指摘しよう。篤志家のおかげで、風通しのいい健康的な 300 床の部屋を有する、ヴィクトル・ユゴー大通り 40（旧オスマン大通り）の国民衛兵隊孤児院の創設をみたのである。

孤児院では、男の子も女の子も、毎日、1 時から 4 時まで、曹長によって、父親が国民衛兵隊の戦いに加わっていることを証明する、「非公式な」証明書が提示された。院長の Raymond は、一方では用途のない子ども用の服やシャツ、短靴を所有している母親に、他方では施設に預けられた男の子や女の子の「世話をしたり教えたりする」協力をしたいと願う「心あるすべての市民」に呼びかけて、不孝な境遇にある子どもたちの救済を望んだ。

2.

おそらく施設はパリ・コミューンの歴史の軍事部門を損なうであろうに、すべての小さなプロレタリアたちの勇敢なすばらしい品行を目立たせるこの場所にふさわしかった。どの子どもも革命の情勢に興奮し、相次ぐ窮乏にいらだち、軍事委員会の非常に厳しい判断が分かるかのように「反乱に非常に有益な協力をなす」つもりになっていた。

確かに、こうしたパリ下町の子どもたち、ガヴロッシュ¹たちは、非常にすばしっこく腕白でもあり勇敢でもあって、革命の難局のどんな時期でもある役割を演じていた。革命の深まりが婦人や子どもたちの熱情ではかられることが許されるならば、子どもたちとその母親たちの力強い参加は、パリ・コミューンが首都に革命の非常に激しい嵐を引き起こしたことに寄与した、と言っていいだろう。

子どもの群れが見られただけではない。「ペール・デュッシェーヌ²の激しい怒り」が道路中に溢れていたし、ラ・マルセイエーズの歌声や「パリ・コミューン万歳！」の叫び声を運ぶ赤旗がたなびいていた。多数の子どもが前線に駆けつけ、バリケード砲撃に加わった。「彼らは要塞の塹壕で戦闘に加わった。」と Lissagaray は書いている。時の新聞は彼らの勇気ある行為を詳しく知らせている。その幾つかの概要を見よう。

14 歳の V. Thiébault は、砲弾の下を走り抜けて、サントゥアンの円形広場の防衛に飲み物を渡した。砲弾は兵士たちが退却することを余儀なくさせ、彼らの戦いに届けられた一

¹ Victor HUGO『レ・ミゼラブル』に登場する少年の名前から取ったもの。ガヴロッシュは「やんちゃ坊主」という意味で使われる。

² ペール・デュッシェーヌはラ・コミューン期に出されていた新聞。

瓶のワインが取り残された。しかしその子どもは、命を賭して、「まだワインを飲んでないよ。」と大声で叫び、ワインを取りに走った。それから彼はカービン銃をつかみ、装填し、憲兵将校を殺した。その後、彼は有蓋トラックを戦闘から救った。

Charles Banderitter、15歳は、ラ・マルセイエーズの第7次の戦闘³に砲兵として身を捧げた。その熱狂、その陽気さは、彼の仲間たちに愛された。彼の確かな目ざとさがそのことを引き立てた。10日9晩の間、彼は部署を離れないばかりか、砲弾を運び続けた。4月18日、彼が射撃の正確さを確保している間に、砲弾の破片が彼の脚を直撃し、殆ど足首をもぎ取った。彼は「共和国万歳！」と叫びながら倒れた。移動衛生班に搬出されるにあっても、彼はけなげにも苦痛に耐えた。ここに、フランスのブルジョアジーがプロレタリアの子どもに歴史教科書の中でお手本としてしばしば与えてきた、もう一人のバラがいるのだ！

「パンシャール⁴の狙撃兵たち」は15歳の少年たちを含んでいたが、彼らは勇敢だった。5月16日、非常に大胆にも、脱出を試みた。命令を受けず秘密裏に、はしごを使って城塞を抜け出し、危険を冒しブローニュの森へと入った。1時間後に帰還し、彼らは憲兵たちにきびきびと行った脱出劇を報告した。メイヨ、ウジェヌ、ヴァシヴィエル各城門あたりのブローニュと同じようなところも、13歳半より1ヶ月小さい少年が、怪我をおして務めを続けた。

3.

5月23日、敵が首都に侵攻してきたと公安委員会が公告し、かの有名な「総てがバリケードへ」というアピール⁵を出したとき、労働者の子どもたちの間では大きな反応があった。

Benoit Malon は、流血の1週間の凄惨な日々の間、「パリ・コミューン万歳！万国の共和国万歳！労働万歳！」と叫びながらバリケードで戦い、敵をやっつけた子どもは5,000人

³ 5月20日までの戦いであることを確認しているが、いつから始まるのかは未調査。

⁴ 「焼きたてパン」を意味する。

⁵ フランス革命暦（共和暦）プレリアル3日（5月23日）に出された。

「善良なすべての同志諸君、立ちあがらんことを！

バリケードへ！敵は我が壁内にある！

ためらうことなかれ！

共和国のために、パリ・コミューンのために、そして自由のために前へ！

武器をとれ！」

にのぼると見積もっている。この見積もりはいささか大げさでないかと思う向きもあるだろう。しかし、パリ・コミューンの兵士の死者の中に間違いなく子どもがいたし、公式にその数が 651 人数えられていること、軍法会議で流刑や収監や感化院収容の判決を受けた者も数多いことからすれば、**Benoit Malon** があながち誇張して言っているとも言えないのである。

若者たちの戦闘部隊は、総て、5月21日と22日、しっかりと武装していた。彼らはパリ・コミューンの秘蔵っ子とかパリ・コミューンっ子と呼ばれていた。彼らはシャトードゥー広場、今日のレピュブリーク広場に駐屯した。この部隊には10歳から16歳の少年が、100人含まれており、彼らは「欣然として」徴募し、一日あたり15スーの給料を受け取った。部隊のほとんどは14歳と15歳の子どもで構成されていたと思われる。彼らは、まず、シャトードゥー広場とフォーブル・デュ・タンブル通りのバリケードの構築と防御に加わった。ラントルポ通りの二つのバリケードは、完全に、彼らによって防御されていたと思われる。続いて、彼らはヴォルテール大通りの入り口をふさいでいたシャトードゥーの大バリケードを退却するために、50まで砲撃を放ちマーニャン通りを防御した。その場所で彼らは、勇敢かつ大胆な行動を繰り返した。彼らの一人は照星をつかみ、敷石に登り、敵兵をものともせず、自分の父親を殺したことを非難した。**Vermorel**、**Jaclard**、**Theiz**、**Lisbonne**はその子どもに降りるように命じた。子どもは拒み続け、そしてヴェルサイユ軍の弾丸が彼に命中した。即死だった。やや経って、同じ場所で、このヒーローの若者だけではなく老**Delescluze**も死ぬのである。そこではさらに、15歳の少年・**Dauteuille**が雨霰と飛んでくる弾丸をくぐり抜けて敷石を乗り越え、バリケードの前で死んだ中尉のケピ帽をパリ・コミューン兵士のところに届けている光景が見られた。

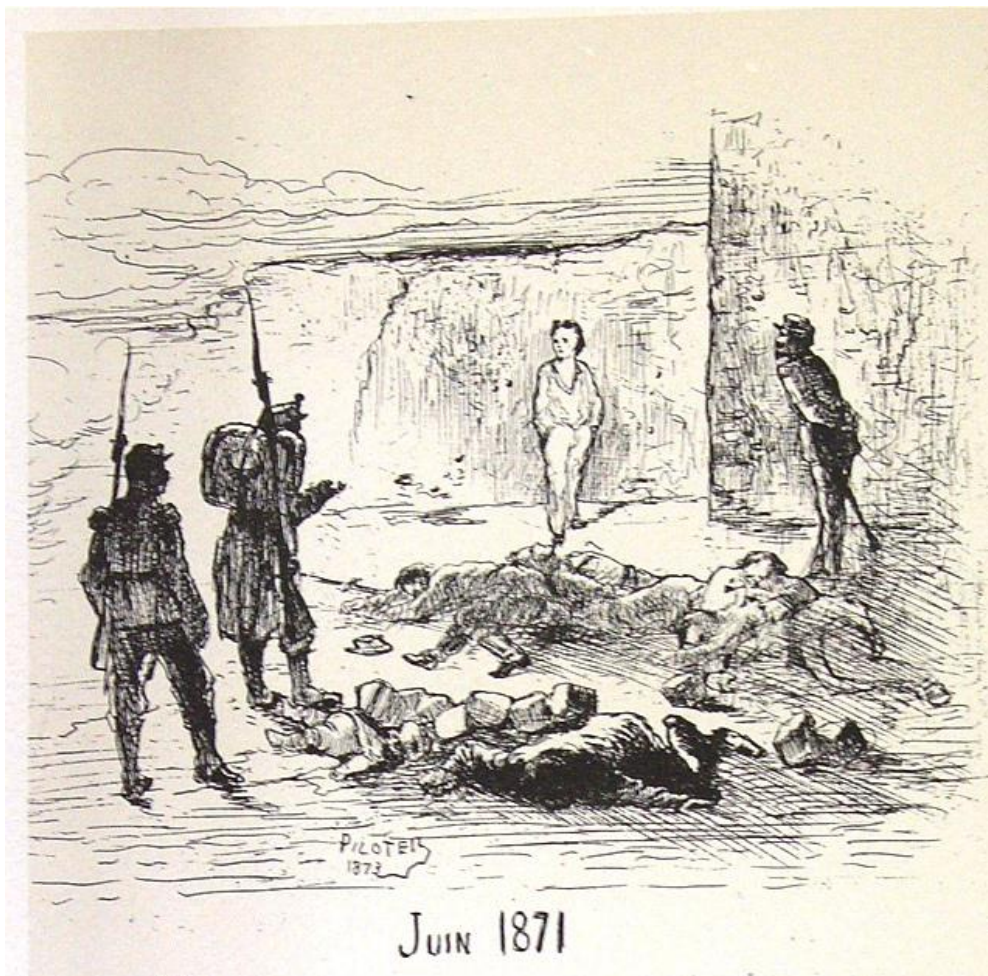
さらに、**Rossel**によれば、15歳ぐらいの少年が、積極的に東駅街での戦闘に加わっていた。彼はバリケードの覗き穴から敵部隊に向けて小銃を撃った。彼が打った弾は総て命中した。覗き穴を替えるごとに彼は小さな赤旗を打ち振り、まるで「勝手知った街」の土地のように振る舞っていた。

4.

タンブル通りの一つのバリケードに着いていた非常に熱狂した射撃手は、およそ15歳の一人の子どもだった。彼のけなげな行動は後々まで語り伝えられている。

バリケードは打ち破られた。そしてその防衛者全員がノートルダム・ドゥ・ナザール通

りを、あるカフェ——より正確に言えばカフェ・ドダール——の前まで連行された。そして壁に沿って並ばされ銃殺された。その子の順番がやってきた。子どもは他と同じように壁に立たされた。ヴェルサイユの将校が進み出た。少年は将校に訊ねた。「お願いがあります。」とその少年は言った。「ぼくのポケットの時計を真向かいのアパートの管理人に渡してきたいんだけど。管理人は時計を身につけてくれる人を知っているだろうから。」大尉は、当然、少年が逃亡することを予測したが、それでも彼は子どもに時計を置きに行かせた。「いいよ、さあ！急いで！」そして数分後、子どもは「まるで重大なことがあるかのように走って」戻ってきた。勇敢にも少年は、仲間の屍の近く、壁を背にし、誇り高く簡潔なことばを吐いた。「ただいま！」将軍とその部下たちはほんのわずかの間互いに顔を見合わせた。そして、少年が無垢の大きな勇気を払ったことで、指揮官が、激昂して子どもの前に突き進み、子どもの両肩をつかみ、「しかし、なんて馬鹿な小僧だ！」と言いながら尻を蹴飛ばす、というようなことを思いつくかもしれないと、期待して待った。



絵 Pilotell (1845-1918) 'Avant, Pendant et Après La Commune'による

このエピソードは、「事件の数日」も経たぬうちに 1871 年 6 月 3 日付のフィガロ紙によって「疑う余地もなく本当のこのようだ」と報道され、またそれは、Victor HUGO に、非常にすばらしい作品『恐ろしい年』の一ページのアイデアを与えた。多くの人はその作品には見事な詩的フィクションを見るに過ぎない。しかしながら、いくらかのつくりごとがあるにしても、その根底には間違いなく事実がある。

流れた罪深い血と清らかな血で染まる

石畳の真ん中の、バリケードで、

12 歳の子どもが仲間と一緒に捕らえられた。

——おまえはあいつらの仲間か？——子どもは答える、我々是一緒だ。

よろしい、ではおまえは銃殺だ、将校が言う。

順番を待っておれ。——子どもは幾筋もの閃光を見、

やがて彼の仲間たちはすべて城壁の下に屍となった。

子どもは将校に願い出た、ぼくを行かせてください、

この時計を家にいるお母さんに返してくるから。

——逃げるのか？——必ず戻ってくるよ。——このチンピラ

恐いのだろ！何処に住んでるんだ？——そこだよ、水くみ場の近くだよ。

だからぼくは戻ってきます、指揮官殿。

——行ってこい、いたずら小僧！——子どもは立ち去った。——見え透いた罠にはめられたわ！

それで兵士たちは将校と一緒に笑った、

瀕死の者も苦しい息のもとで笑いに加わった。

が、笑いは止んだ。思いもかけず、青ざめた少年が

ぶっきらぼうに戻って来、ヴィアラのように堂々と、

壁を背にして、人々に言った、ただいま、と。

愚かな死は不名誉である、それで将校は放免した。

Benoit Malon によれば、軍法会議はこの若い英雄を感化院に送致した。それは大いにあり得ることではある。しかし、この説を証明するものはおそらくないであろう、その子ど

もの名前は今日までまったく判っていないのだ。

詩人で社会主義活動家の Charles Vérecque は、アミアンのカテドラルを題材にした有名な演劇『立派な罪』で知られる。彼もまた、1905年11月26日、詩の一節を「小さなコミユナル⁶」に割いている。詩は正確な筆運びとなっている。

子どもは15歳、壕の中にいた。

不意をつかれて、軍の手におちた。

バリケードの近くにいたヴェルサイユ軍の将校が、

子どもを呼び寄せ、こう聞いた、「坊主、そこで何してた？」

子どもは叫んだ、「ぼくはパリ・コミューンの兵士だ。

それでおまえらに背くというのなら、けっこうだ、ぼくを撃ち殺せ！

人を殺すなんて、おまえらには、あたりまえすぎることなのさ

気兼ねせず、迷いもしないでおやりになることなんぞ。」

将校は少年の死を決め、壁へと移動させた。

子どもはことばを続けた、「ねえ、ここにあるぼくの時計を、

すぐ前の、家にいる、お母さんに、

渡してきたいんだ。ほんのちょっと。行って帰ってくる。」

そして少年は兵士の手を振り切り、

2分後には、少しも動揺を見せず、

姿を見せた、決然と、自分から。

少年は約束を守り死を望んだのだ。

しかしながら、Vérecque は、最終節で、忠誠に対する残酷な犠牲を子どもにもたらしめている：

元の壁の前へ、将校は彼を連れて行かせた。

⁶ コミュナルとはパリ・コミユヌに参加したものを指して言う。

兵士たちが発砲した。少しもたじろぐことなく、
子どもは、暗黒の運命に身を任せ、
崩れた、両の目は悪魔の将校をキッと見据えながら。

この詩に添えられた注釈によれば、リル図書館に蔵書されているパリ・コミューンの広報の写本を読んで、Vérecque は、「抒情性に駆られそれほどの残虐性を信ずることができなかった」Victor HUGO を修正することができたという。広報にはその子どもが「本当に銃殺された」と示されている。

パリ・コミューンの広報紙の、とりわけ、最終号である 1871 年 5 月 24 日付けを確かめてみると、Vérecque が見いだしたという証拠を探し求めても無駄である。「15 歳を超えない 20 人ほどの子どもによって」、数時間で、タンブル地区郊外からつながる通りの一つにバリケードが築かれた、というのはとても疑問である。そして小さなコミューナルのエピソードの痕跡はない。それ故に Vérecque が引用した資料に証拠を見いだすことはできない。

Lissagaray はタンブル通りとつながっているタンブル地区郊外で子どもが捕らえられたバリケードを断定している。彼は 3 分後にかの少年を戻させている。それで、子どもが「道に飛び降り、すばやく銃殺刑に処せられた仲間の死体の近くの壁を背にした」と述べた。「不滅のパリは、」と彼は付け加える。「まさに、こうした人々から生まれるだろう！」しかし Lissagaray は若きヒーローに何が起こったのかは述べていない。

Léonce Dupont は、その著『パリ・コミューンとその補助者たち—正義と向かい合って』の中で、ある軍中尉によれば、前述の出来事は場所に関してはつまびらかではないとのことだ、と述べている。その見解は『フィガロ』紙とほぼ一致している。つまり、脚への被弾の結果、その少年は、将校に、「なんという卑怯者！」とことばを投げつけ、そして死んでいった、というのである。

Gromieru による『ある敗者の日記』前書きにおいて、Pierre de Lano が詳細に語ったところによれば、やはり、旧書記官の Félix Pyat が小さなコミューナルのエピソードについて『フィガロ』紙の話と一緒に結末を Pierre に語っていた、としている。ただ Gromieru は、エリーゼ宮殿の庭で、そして「ヴェルサイユ軍がパリ・コミューンの兵士たちの手中に落ちていたこの歴史的建造物を奪い返そうとしたちょうどその時に」事実が起こったとしている。

「15 歳ぐらいの」その少年は、ミロモンヌ通りのアパートの管理人である母親に時計

を預けに行くことを求め、幾人かの将校と宮殿要塞司令官 de Belvalle——彼はパリ・コミューンの間パリに留まっていたのだが——に囲まれていた連隊長が、子どものことばに「仰天して」立ちすくんだという。『フィガロ』紙に書かれている最後の蹴飛ばしのは、この解釈でも見られる。将校の最後の叫びはほとんど同じである、つまり「いまましい奴め！ さっさと行って母親のところに帰るがいい！」と。

de Lano は、事実と、完全な抑圧のもとで「人間味が彼らの権利をすっかり奪ってしまったわけではない」ことを証明するための明らかなこととを結びつける、ということには触れていない。だが、彼の考えのアウトラインは、なんなく『フィガロ』紙の話を思い出させる。繰り返されそして作り替えられ、語り伝えのようになったために記事の本質の正確さが失われてしまっているのだが。それでも、細部はどうあれ、劇場で上演されそのシーンを役者たちに演ぜられると、判断を狂わされることにとまどいはない。

5.

Allemane は、その著『回想録』の中で、二人の 15 歳ほどの子どもがセーヌ川左岸の最後に残ったパリケードの側で銃をとっていたことを語った後で、死へと追いやられたもう一人の少年のことを指摘している。前述の二人、すなわち、せいぜい 14 歳の Georges と Arnaud は、実のところ、砲撃されたのではなかった。それでもなお彼は、銃殺隊の砲火を浴びる前に、ドイツの証言で、見たことを弁明することを拒んだとして、英雄の証とされた。が、彼はそのことで逮捕の原因となるのを怖れたのだ。

モントロージュでは、カツラ屋の子どもである 10 歳の少年が敵によって助けられた。彼の父親は銃殺刑にされているが、死を前にして「また兵士になって戦うことを誓うぜ！」と言った。そして、兵士たちを前にして、子どもは勇敢にも言った、「ぼくは誓うよ！」と。

ああ！生き延びることができたわずかな若きヒーローたちに対して、なん百という小さなプロレタリアたち——飾りひもを付けた死刑執行人をして言わしめた「叛徒の種」——は、ブルジョアの報復の生け贄とされたのだ！何人もの小さな子どもが通りや広場の小さな公園、いろいろな戦場の「コーヒー挽き機まで」行ったことか。というのは、『独立ランス』というような中立の新聞特派員が記しているように、まさに「オオカミの雄、雌、子どもの隠れ場」を壊すことで公共の安定を保障しようとする、むごい指令が出されていたのだ。

しかしながら、Camille Pelletan は、1871 年 5 月 28 日午後、シャトレ正面で、死刑囚

が引き立てられているのに怒鳴り声を浴びせていた人混みに偶然出会うし、聞いたことをつぎのように記している。

私は4人の巡査に引き連れられた6人の子どもが軍隊裁判所から引き出されるのを見かけた。最年長の子どもはやっと12歳、最年少の子どもはやっと6歳であった。哀れな子どもたちは、通りすがりに、これらの見下げ果てた人たちで作られた人垣の中で泣いていた...

「殺せ！殺せ！」とこれらの野獣たちは叫んだ、「反乱を起こした奴には死を」

一番小さな子どもは素足のまま木靴を履いており、ズボンとシャツしか着ておらず、泣きじゃくっていた。

彼らがロボウ兵営に入るのを見ていた。門が閉ざされた時、私は「子どもたちを殺すとはとんでもないことだ。」と非難した。その場を立ち去るしかなく、私は、何とはなしに、大勢の人と同じようにシャトレに向かった。

さらに著者は、その著書の中で、一人の受刑者の顔を舐めた犬に言及したあとで、次の引用のように述べている。「その犬にこそ、5月のその週における人間らしい感情を見いだしたのだ。」

シャトレでの出来事まで来たのだから、『デバ』誌の編集者が、Camille Pelletainによる証言を確認して、語っていることを付け加えておく。銃殺のためにロボウ兵営に連れられていく15歳から16歳の少年がこの建物から連れ出されたのを彼が見ている。

子どもを謀殺したという他の証言を必要とするのか？では、一人の外国人にそれを求めよう。de Hübner 伯爵はオーストラリア将官であり、パリ・コミューン下のパリに滞在していた。彼は父親に宛てた手紙で告白している。手紙は1907年『ル・コレスポンダント』誌に発表された。5月26日金曜日、この外交官は、コミユナルたちが退却させられ、鎮圧が猛り狂ってなされた界限を走り回り、「裁判抜きの処刑」に「言う言葉を見いだせなかった」、「と同時に」、彼の目に映る「もっともふさわしい立場」として「熱狂と勇壮さの例」を知らせずにはいられなかった。

新聞『レ・ドロアット・ド・ロム』によれば、16歳の子どもがウトフォアイユ通りの階段のところで銃殺された。何人もの兵士が「降伏せよ！」と叫んだ。「ノン！ノン！」と勇敢な少年は応えた。同じ界限で、15歳の男の子が、大胆にも嘲弄して、右耳あるいは左耳に銃の砲身を当てるようにと、兵士に求めた。それから、彼は自ら進んで銃殺隊の前に立ち、崩れおちた。

この種の行為はあるブルジョア三文文士によれば「ちんぴらの横柄さ」なのである。彼は13歳から14歳の一人の子どもの話を書き記している。5月23日、ブレダ通りとナヴァラン通りの街角で、選り抜き部署について、砲撃をした。角の酒屋が、時折、勇気づけのために彼にワインを注ぎに来た。彼はワインを飲み、指揮官は彼を銃殺刑に処することをためらった。「ぼくを殺せばいい。次もぼくはやるから。」と彼は言う。指揮官は銃殺を兵士たちに委ねた。

ヴェルサイユでもまた、軍法会議の前にして、戦闘の熱狂が醒めたとはいえ、小さなコミューナルたちの勇敢さが注目される。

およそ15歳の子どもの場合、尋問を受けた後、彼は、まるで命令されたかのように、まったく部屋から離れなかった。片隅でポケットに手を入れたまま居続け、それをいぶかる人たちに非常に静かに答えた。「すぐにぼくを銃殺にと思ったよ！」この証言はヴェルサイユの新聞に由来するものであり、反乱者たちに対して中傷が激しくなされていたときのものだけにますます価値がある。

これら若々しい勇者の話とともにヴェルサイユ軍の信じられないほどの残虐さは、パリ・コミューンの防衛で子どもたちによってなされた重要な役割を証明しているのである。

(出典：Maurice DOMMANGET：“HOMMES ET CHOSES DE LA COMMUNE”，
édition de la COOPÉRATIVE des AMIS de “L'ÉCOLE ÉMMANCIPÉE”，Marseille.)